

平成15年 5月 1日

健苗の育成と適期移植の徹底について

やまがたこだわり安心米推進運動本部

4月中旬以降寒暖の差が大きく推移している。中旬は高温で降雨のない日が続いたが、5月中旬は一転して低温で降雨が続いた。播種作業は平年並みに推移しており、本田耕起作業は、庄内地域で始期が平年より3日早かったが、県全体では降雨の影響で平年並みからやや遅れている。

健苗の育成と適期移植は、品質と食味が高い米づくりのために重要な技術である。5月上旬は寒暖の差が大きくなる時期なので、育苗期間中は気象変動に迅速に対応して温度管理を徹底して健苗を育成するとともに、適期移植を徹底する。

水稻直播栽培の播種作業は、庄内地域で始まっている。今後内陸地域でも播種作業が行われるが、早期苗立ちを確保するため、播種後の落水管理を徹底する。

また、耕起作業はやや遅れている傾向となっているが、心にゆとりを持ち、農作業安全に十分注意して事故を防止する。

1. 水稻作業の進捗状況

播種作業は、ほぼ平年並みの時期に実施された。耕起始期は、庄内地域は平年より3日早い4月16日であったが、5月中旬の降雨により盛期は平年並みの4月24日となった。内陸地域の耕起始期は平年より1日遅い4月30日であった。県全体の耕起盛期は、降雨により平年よりやや遅いと見込まれる。

表1 作業の進捗状況

地域	播種			耕起		
	始期		盛期	終期	始期	
	本年	平年	本年	平年	本年	平年
県	4/14	4/13	4/18	4/17	4/24	4/23
内陸	4/15	4/15	4/20	4/19	4/26	4/25
庄内	4/12	4/10	4/15	4/13	4/20	4/20

2. 土壤の乾燥状態

山形農試および庄内支場では、生土と半乾土が多く乾土が少ないとから、土壤の乾燥が進んでいない。このことから、乾土効果は小さいと推定される。

表2 土壤乾燥度割合

		土壤水分(%)			構成割合(%)		
		乾	半乾	生土	乾	半乾	生土
山形農試	本年	7.7	21.7	32.1	8.8	8.3	82.9
	平年	7.5	19.9	27.6	19.6	21.0	59.5
	平年差	+0.2	+1.8	+4.5	-10.8	-12.7	+23.4
庄内支場	本年	15.6	26.0	36.0	5.8	10.4	83.8
	平年	12.7	27.0	36.3	15.3	16.8	67.9
	平年差	+2.9	-1.0	-0.3	-9.5	-6.4	+15.9

表3 乾土効果発現量の推定

地點	本年	平年	平年比
山形農試	0.51	1.24	41%
庄内支場	1.59	3.69	43%

3. 苗の生育

4月5半旬の気温が平年より低く推移したため、出芽やその後の生育がやや遅れていたが、現在は回復している。庄内支場の調査によると、4月30日現在の苗丈は平年よりやや長く、葉数はほぼ平年並みとなっている。

表4 苗の生育（庄内支場）

品種名	草丈 (cm)				葉数 (枚)			
	本年	前年	平年	平年比	本年	前年	平年	平年比
はえぬき	8.5	9.3	8.3	102	2.0	1.9	1.9	+0.1
ササニシキ	9.0	10.1	8.4	107	1.9	1.8	1.8	+0.1

4月14日播種、4月30日調査

表5 平均気温の推移

地域	年 度	4月					
		1半旬	2半旬	3半旬	4半旬	5半旬	6半旬
山形	本 年	6.7	8.4	10.2	14.3	10.1	14.8
	平 年	6.9	8.2	9.1	10.3	11.7	12.8
	平年差	-0.2	+0.2	+1.1	+4.0	-1.6	+2.0
酒田	本 年	7.8	9.4	10.5	12.5	10.1	13.4
	平 年	7.6	8.6	9.5	10.5	11.6	12.4
	平年差	+0.2	+0.6	+1.0	+2.0	-1.5	+1.0

4. 当面の技術対策

- (1) 育苗期間は、温度管理を徹底して適温（硬化期：昼間15～20、夜間5以上）を維持する。硬化時期になると気温が上昇して苗がのびやすくなるため、換気により高温障害や苗の伸びすぎ回避に努める。また、移植近くになり降霜のおそれがない日は、夜間も保温資材を解放するとともに、節水管理などで苗の老化防止を図る。
- (2) 移植時期が早すぎると、 m^2 あたりもみ数が多くなったり、出穂期が早まって高温に遭遇しやすくなるなど米の品質や食味に悪影響を及ぼすことがある。本田の準備と育苗作業を計画的に進め、適期移植に努める。（庄内地域：5月10日中心、内陸地域5月15日～20日）。
- (3) 乾土効果は小さいと推定されるが、施肥は基準量を遵守し、平坦部では活着期追肥は行わない。なお、例年初期生育確保が困難な中山間地等では活着期追肥（10a当たり窒素量1.5～2kg）を行う。
- (4) 近年栽植密度が低下しているほ場があるが、茎数や穂数の不足になりやすいことから、 m^2 あたり22～24株、植え込み本数4～5本とし、 m^2 あたり100～120本を確保する。
- (5) 昨年はカメムシによる被害が大きかったことから、気を引き締めて地域ぐるみで対策の徹底を図る。特に、常日頃から畦畔や周辺の除草管理を励行し、生息密度の低減を図る。
- (6) 直播栽培では、播種後から出芽期まで積極的に落水状態を保ち、ほ場に停滞水がある場合は播種後に作溝で排水する。また、還元が強い土壤では、暗きよの水閘を開くなどして積極的に落水状態を保つ。
- (7) 農作業事故を回避するために、作業に入る前に無理のない作業計画を立て、ゆとりのある作業を推進する。特に農作業が集中する時期のため作業を急ぎがちになるが、心にゆとりを持つことが大切である。